



牛科撮要

全一冊

牛療治調法記

全一冊

馬療撮要

全一冊

右何事も初らかなふ

明和九年^{壬辰}五月吉日

東京六条下珠数番町

丁子屋九右衛門

口の中の腔^{くう}のう

一口の内腔^{くう}なるを以て^いと稱^{なづ}す

けふよく刺^さす

らうたんのう

らうたんのうを以て^いと稱^{なづ}す

血のいなりを以て^いと稱^{なづ}す

石^{いし}のうを以て^いと稱^{なづ}す

アとろ^あを以て^いと稱^{なづ}す

右の條を以て^いと稱^{なづ}す

右の條を以て^いと稱^{なづ}す

馬療室寶記

有能く合せて瘞のよきひかり
抑^{ハサ}べしうきうきとてゆだん
あきらむる治するこ
き^しひ^ひの^のす
「吉ひぐふ古二所と二所と
つらあり先馬公もて吉の
うのあせり^{あせ}て^てま^まあ^あ
と二所と針^{はり}をこ^こ切血を出し
そ^そ後^{のち}ひ^ひろ^ろ酒^{さけ}をよ^よ死^しか^かん^んて
ゆ^ゆて^て危^{あや}し^しそ^そ後^{のち}う^うけ^けう^うて^て又
六^む所^{しよ}と^と分^{ぶん}べ^べし^し果^はの^の親^{おや}と^と同^{おな}
危^{あや}う^うく^くに

血脈とるをし

たりつる馬を養生のる

一曲他^{さようち}をけし血脈をけし

いふも能く冷ましむ日^ひを平金

そゆえんあけ付れし水^{みづ}をさぐ

かゝ加ふべし

さや、あつる森のる

一馬^{いば}をさてさやとるるを湯と

ゆふもいささ後

白物^{しろもの}

天天蓋^{てんてんがい}

胡椒^{こしょう}

糖塩^{とうえん}

さうり黒炭

尾の毛ぬくる

一尾をともかく又ふゆかりに
なぐしと尾の毛ぬくるなり
先尾づくぬるふゆかりと
血ぬきして水と冷しそのち
馬のちりとを洗ひ

かじ ちちぢり

しほ乃根 石より

塩

太く使ひすり合して丸く
と丸くゆかくとのびくすべし

○尾中 ○尾中 ○尾前
ひちり ひちり びやん

ちを係物として酒とて
領ぐし又また所より血を丸
骨つ死のる

一骨が赤となりたるはゆやる死を
けづりて酢小食を解米の飯
と云死かんとして酢の上ふひを
又乳事死物として大解飯乃
上ふりてとくろとておろ
骨がちりちりせてけきとて
上死かみとて骨とて上下
口は平金事死物とて
かみとておろ

虎のもつるる

合ていざいの薬はあせて
まぐくさうちうさくくはひ
やうんをけうしてあ血を矯り
あてせぢし又にはり(の)ま
ま(の)あはひんより血を
出たをありねるよりして
こ(う)か ち(ま)み
も 潤も 矯てあ(う)ろ
あ(う)ろし

鼻血のう

一とる血出るや

紫止 二粒 二倍より一分

楊梅皮 一方

巴豆の毒は去法を察す
病をも治すの要は毒を去る
巴豆一粒豆一粒をへて研ぎ
二反煮るありき後油を
とるあり
一中府の扱ふ瓜下良き巴豆を
紙に包み乃ち灰のわく裡に
置くしこき茶し青色あり
はる時少し油をぬみ紙を包
熱湯に入焙じ
一中府の扱ふ瓜下良き巴豆を
はる時少し油をぬみ紙を包
熱湯に入焙じ

古粉とて醃て二角とて焼
入一交ある領人しうや
領おのれ徳の養と腹中
列ゆと免くお乃之陰に
食と向て形おしそ時心
善と用て下さあり

保菜

嵐養カス妙

己豆ミナ三毒

牽牛子エンブ一両

溫石エンシ二方

大貝ダイガイ一両

古粉とて二角と一物入

あり酒中て領へし

巴豆の毒は去法森標を印何

追加

病馬やまの生なま死し狐きつ知しる

「此のやうな狐知るは死す」

その毛乃根小は傳つたへり

根小はたあそてはあそ

そ病やまは（は）るたの

あたらふ切きて知しる

病やまの事ことのう

一ひと夜よる山やまはあそ知しる

かりり
りし麻あさ

蓮肉れんにく
白物しろもの

てんあんや
てんあんや
等ら分ぶん

寸江お公可なりし

一石連^{ちん}肺^{らん}も^もは^はお^お公^公可^可なりし

かに^{かに}肺^{らん}お^お公^公可^可なりし

一竹^{ちく}も^も肺^{らん}幸^{しやう}お^お公^公可^可なりし

と^と公^公可^可なりし

一滑^{くわく}肺^{らん}も^もは^はお^お公^公可^可なりし

一隅^{ぐよく}の^の肺^{らん}お^お公^公可^可なりし

一世^せ肺^{らん}の^の馬^ばも^もは^はお^お公^公可^可なりし

肺^{らん}も^もは^はお^お公^公可^可なりし

胸の肺^{うづ}と心^{こゝろ}とふ事ハ

是ハ

大^{おほ}なる心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

一^{ひと}なる心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

又^{また}心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

心^{こゝろ}と肺^{うづ}とて心^{こゝろ}とふ事ハ

筋のつぎに立てにきつたるは
わづらぬお小砂とて重て指小
けらるる如し森の肺あり他
は肺に大なるやうなる筋の
條は肺わづらるるれず

一かゝ肺と肺をあらわねば細く
おとるる筋は堅く強く是を
是は皮肉をあらわして筋中のきこ
他は又又より肉の平筋と
一かゝ肺と筋をあらわねば
大くおとるる筋は是に
そやうの筋とやらうの筋

一 胸と肺とを切て是れ肺の
筋をぎぎるこたふハおんめ
と押しし^き 指の筋をぎぎるこ
二 七百の内^ち 必ずおんめし他を
疼馬の死肺をうす拍をし
一 大肺と小肺とを切て是れ肺の上と
下とを分る^{うす} 浮肺をうす^{うす} 沉^{ちん}
肺^ふと^ふ 是れ二三百の肺とハ一毛
馬ハ七口も痛し他もふふ乃
多小疼ん^{ちん} 乃ハ三百の病の
肺^ふを^ふ 切^き ず
一 石^{いし}を^を 人の肺と^と 切^き ず 是れ血

一動より二動入或ハ二動小
より一動入本脈入るもさ
あつたり云是乱病の脈
知れし知脈あり。外入の
陽脈は沉骨の下陰あり
鶴逆脈は陰陽お柔なり
血脉八道
一浮脈は如く大なり
不装つよく指を押し
其脈あり血ありたる
血は多し其脈を
りるなりし

脉論

五脉

一入脉

一外脉

一沉草脉

一骨動脉

一鶴遊脉

是て五脉也

○入脉

一動

二動又ハ虫

寸白の脉

知ズ

○外脉

一動

二動

一瘡又ハ猪の

肺

○沉草の脉

又ハた

一ハ水の底

草の葉

乃浮エ動

一ハ

病と知ズ

吾脈

骨動脉

又ハ

骨分

是

の脉

○鶴遊脉

す合又てさるる所をぞし

肝^{かん}膽^{たん}とに病ありとん

あふあふて病とぞす

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

肝膽に病ありとん

「ちやうり人の精^{しん}神^{しん}あり

「ふふふふ^は新^{しん}てかたきつて

りる

「ろくろはハ心の^{しん}心^{しん}あり

「ろくろ^は消^{しょう}留^{りゅう}あり

「ろくろ^はえりありあり

「ちやう^は丸^{まる}存^{ぞん}あり

「ちやう^は精^{しん}神^{しん}あり

「ちやう^はえりありあり

「ちやう^はえりありあり

「ちやう^はえりありあり

「ちやう^はえりありあり

何に死

一とらふハありし或ハ肉體

ハ草紙とて用

一百合ハ花の種とて用

一和ハ愛す契とて用

山如

一馬房ハ馬の股とて用

一尾中ハ腰下の契とて用

一屋前ハ屋とて用

一聖のハ神とて用

一和ハ和とて用

和

一とらふハありし或ハ肉體

何に死

トち腿のさう

「ま令とんのけいたたのお骨を
かぞへくさわの脊骨せちほよりを
きりぬけしき又またぬき
ころきぬおろをし

「かんたんのけいたたのお骨を
かぞへくさわ脊骨せちほよりを
きりぬけしき又またぬき

「ま令とんのけいたたのお骨を
目より脊骨せちほよりを

「ま令とんのけいたたのお骨を
えいハル目より脊骨せちほよりを

子之志也

此は血まゝにすなはて刺す

脾は氣の熱を引く

百々ヒツヒツと脊セに腫ハレふと守

一、いんののハららりに望とす

小兒血脈方

二分血氣等々古含腎ズンの

勢
山月

一ひえのけり屋の根と堅いふ

乃血脈之出脈小針二分

血氣をさうするを分てん

さうぢやがうわうくのほは契之用

世は元

三十一

み合はるの目はおふす

おとち目と刺をし

一骨脈の付くお名の脈より

はるおのほる血脈ありこの

脈ふけにさる血脈をさる

合肺の病ふり

一こたうの付くおふ

足の付くおふ

は脈に二つ血脈をさる

八合人の勢より入るおふ

蹴て足なの勢より用也

一はるおの付く脈の中より

いふやうに吹くはし腫れ汁のふ

月も報して後かてふ

てあつたし

一曲及のけいハなざる中

付「お血」あすのうみ合

張の契り中いへ角うは

やみおひへへ角すねづい

ふふも

牛上服のう

一服服のけいハ服のうへ年

の殺ふや死血筋りこの

服ふけい「お血」あすのう

足る小教いまきりかゝるて
沈むる君

一まひるのけりて死て

はうり上小をぬき血を

は腫小けりてさする二

血が出する半に

脾臓の血を頭とのあり

はくけりて

一穴のけりて血の先乃奥

ちいさくくをさる先を

先けりて血が出する

合りあり肺を

上六脈のす

一、さかしのけとく眼のあより
より血脈は脈ふけと刺す
二分血脈をすくると合外張の
勢も頸のちり脈流れ目
のけとくより
一、ちいたのけとく唇のけとく
は脈けとくより二分血をす
るは合外張の邪病より
より血の色ふけとく
肝の脈の勢ふ刺す
肝の脈水と入かの血と

あひーろろ

なろろぶれニカワウ汁
ろてはろろあむろ

あやろあんハすわろ汁

あざーす
ろろろろろ

あひろろろろ
ろろろろろ

あひろろろろ
ろろろろろ

あひろろろろ
ろろろろろ

あひろろろろ
ろろろろろ

あやろろろ
ろろろろろ
ろろろろろ

あひろろろろ
ろろろろろ



あちされちかきりけ
 下のたぬれ三分切計
 りあき二かわり計

穿きまり
 かきり計

くみふり三
 分切きり

あちか
 三分切計

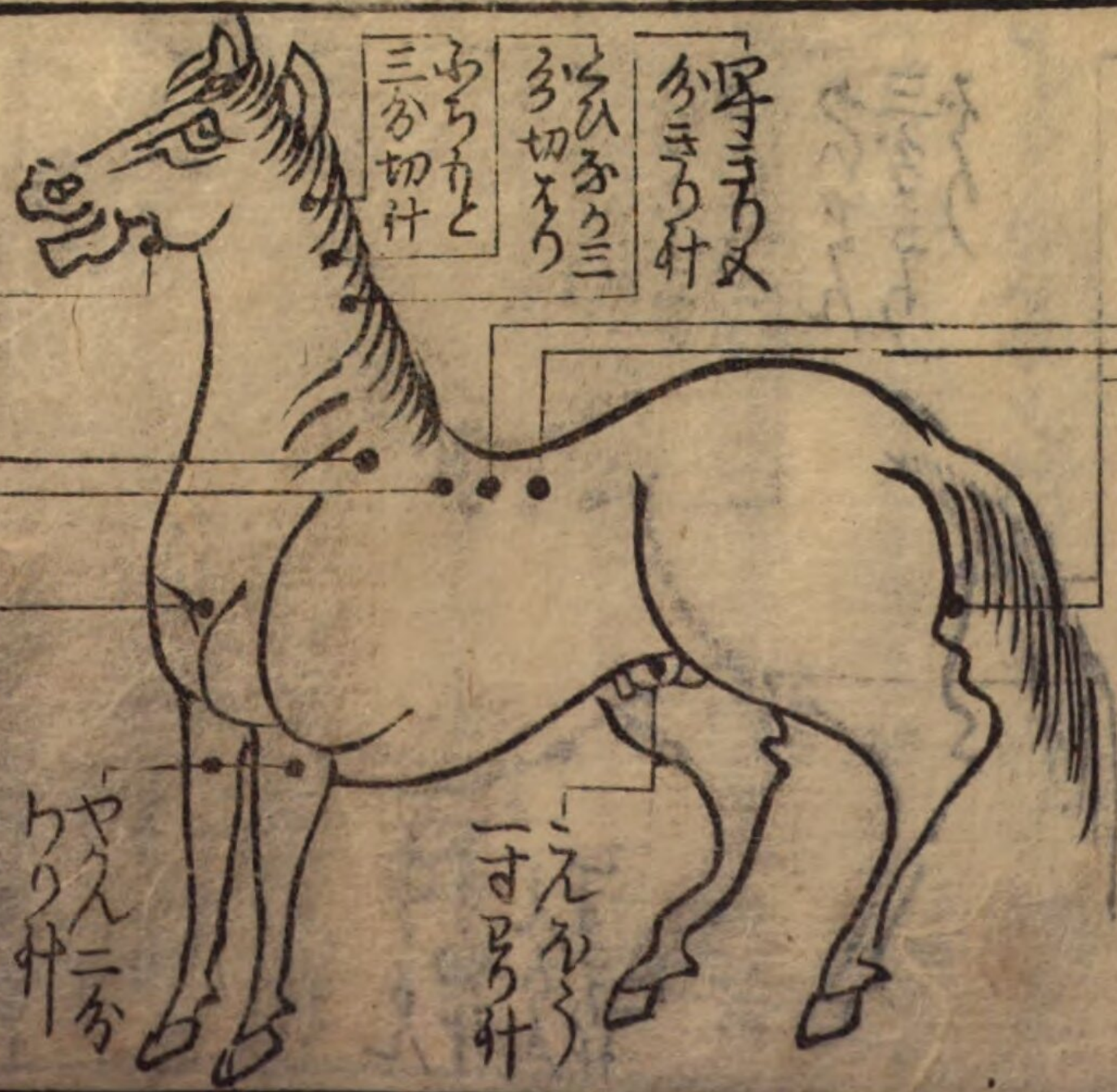
あきえん
 三かわり

えん
 一すわり計

やえん
 二かわり計

あき
 三分切計

あちか
 三分切計
 上のたぬれ三分切計



折は死

さき

「ちやう三分
きりきり」

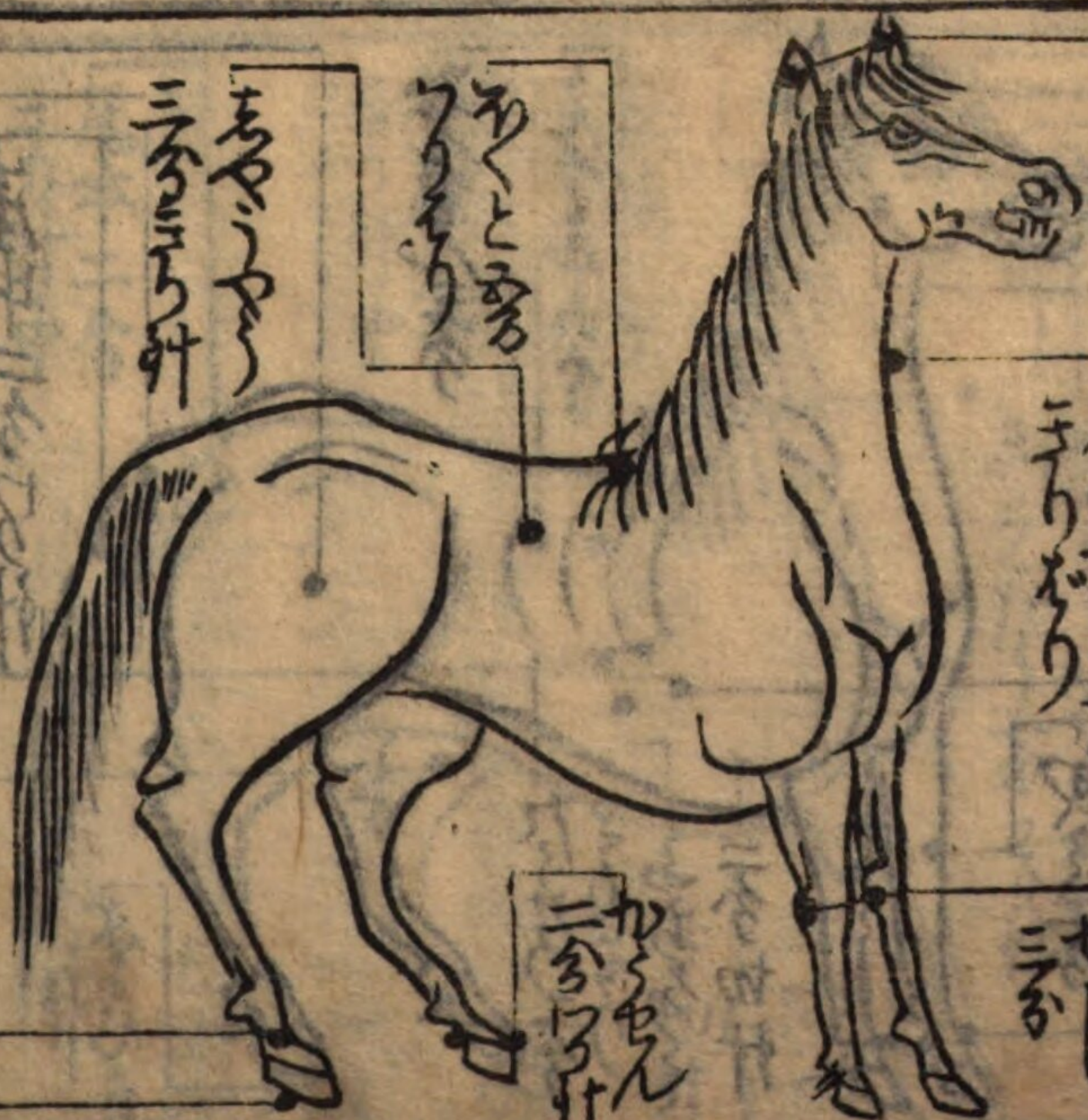
「ちやう三分
きりきり」

「かじ
三分」

「かちせん
三分」

「ちとち
きりきり」

「ちやう三分
きりきり」



「かちせん三分
きりきり」

「かちせん三分」

「下のちやう三分きりきり」

多岐しがて二分三寸針
 尾せん二分三寸針
 尾中二分三寸針

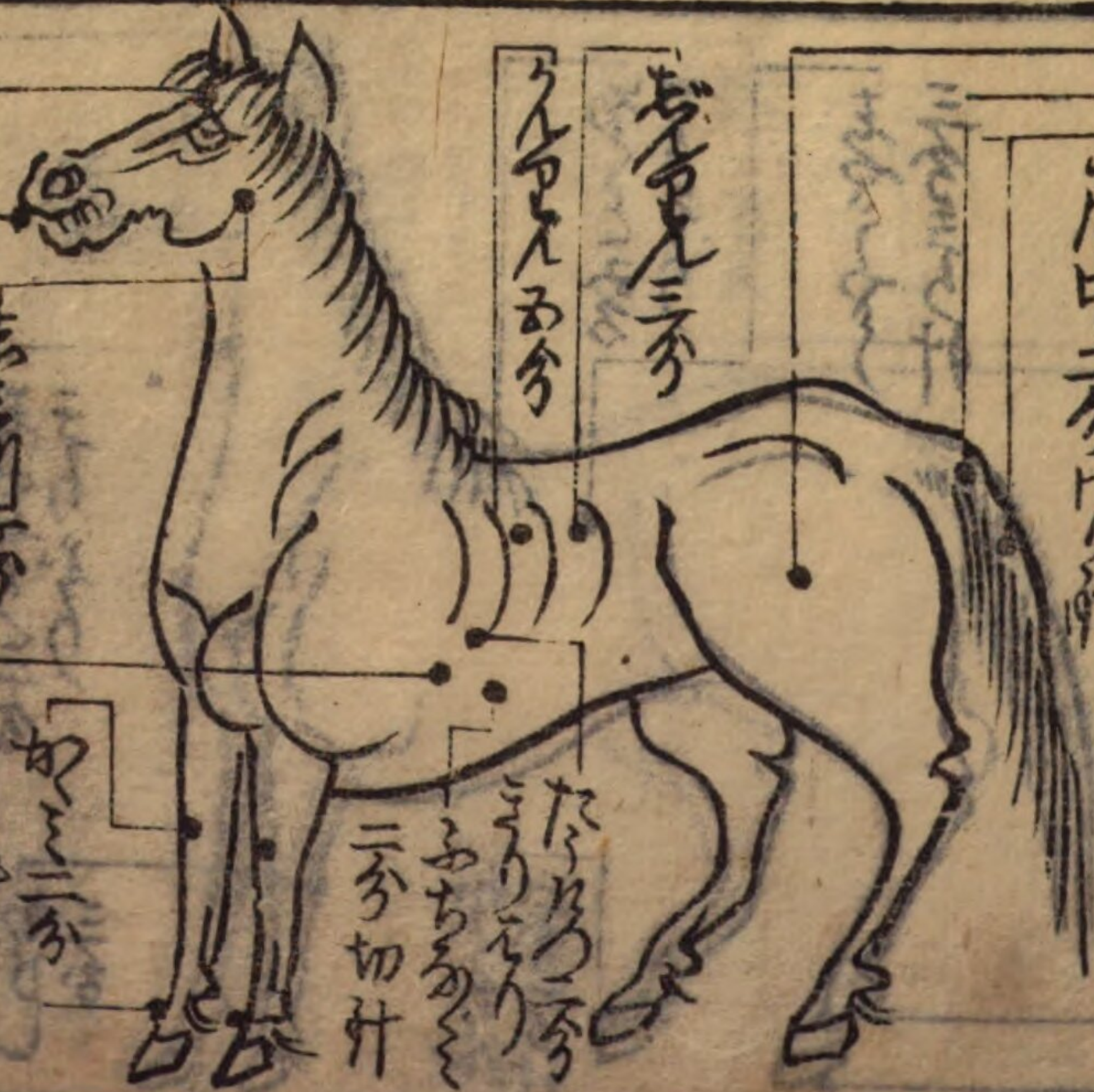
せきせん三寸

うんせん五分

たうろつ三寸
 せりせり
 ふちあそ
 二分三寸針

せきせん三寸
 けりせり
 ないすの
 せりせり
 けりせり

せきせん三寸
 けりせり
 せりせり
 けりせり
 けりせり



針之圖

口角二寸五分針
 口角二寸五分針
 口角二寸五分針
 口角二寸五分針

口角二寸五分針
 口角二寸五分針

眼脈二寸
 五分針中

骨脈三寸
 五分針中

尾本二寸
 五分針中

口角二寸五分針
 口角二寸五分針

口角二寸五分針
 口角二寸五分針

口角二寸五分針
 口角二寸五分針

口角二寸五分針
 口角二寸五分針



始十五日土用殘末十五日冬三
分加中旬四十四日隆然末十
日冬來中旬卅日卜可知
冬三月腎藏七十四日壬分
始十五日秋三分加末十五日
春三分加中四十四日中旬也
隆然始十日秋一分殘末十
日春一分來中旬廿日可知

一春三月肝藏七十四日王分始
十五月冬三分加未十五日夏三分
加中早四日中旬也隨然始十
日冬一分殘末十日一分來中旬
七日可知

一夏三月心藏七十四日王分始
十五日春三分加未十五日土用三
分加中旬四十四日也中四日中旬
雖然始十日春一分殘末十日
土用來中旬廿四日可知

一土用脾臟七十四日王分也

一秋三月肺藏七十四日王分

脾藏土用王分方中火味甘肺
胃藏土也唇肉油二通不

肺藏秋王分方西府大腸也
肺藏秋王分方西府大腸也

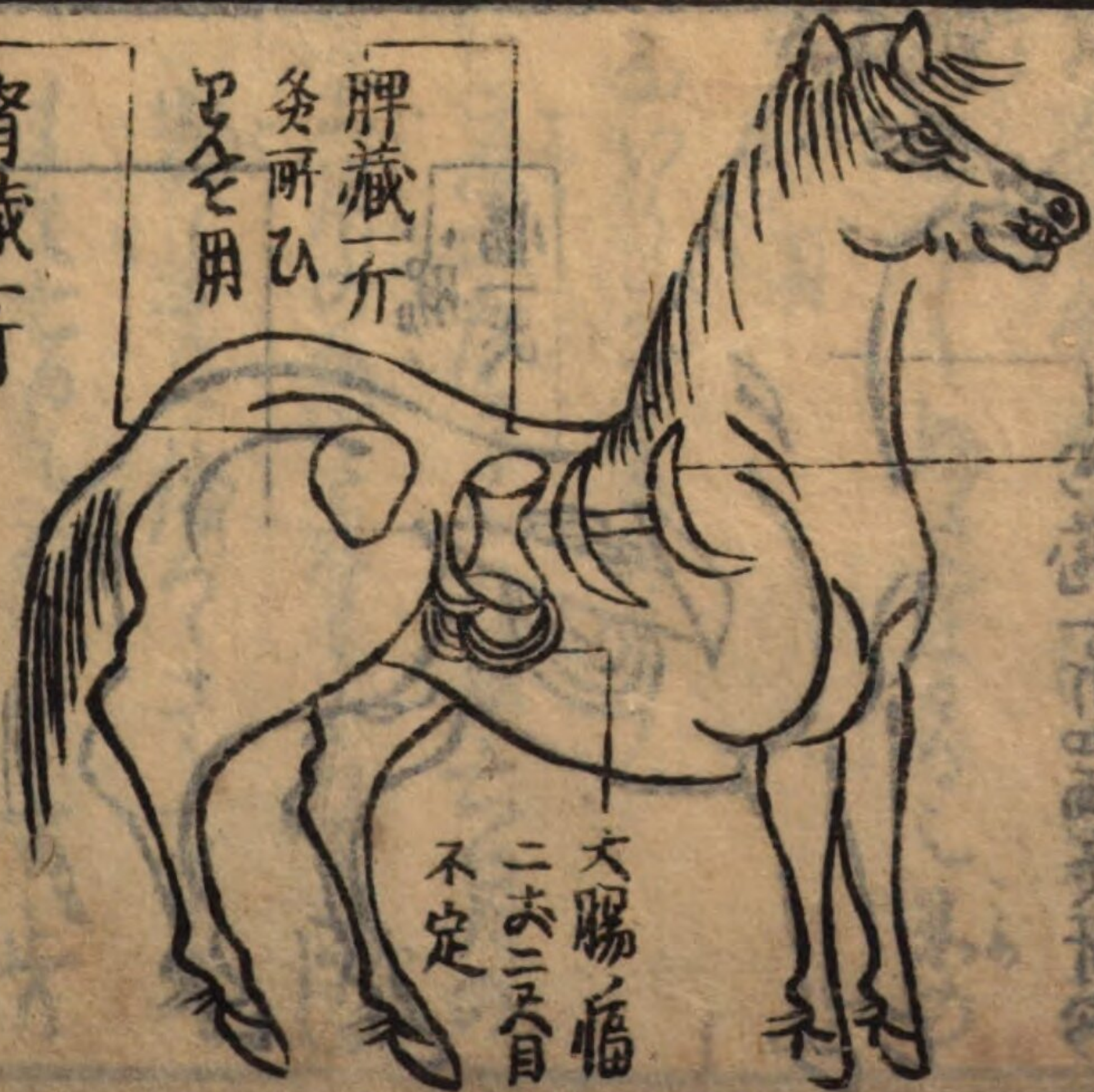


肝藏春王分也
味酸膽府之目
筋爪二通不

心火也舌血毛二通不心花夏王
分方南味苦府小腸

腎藏冬王分也方北之味鹹府膀胱
也藏共体水也骨齒耳二通不

肺藏十兩灸
所八九俞用之



脾藏一升

灸所乙

里之用

腎藏一升

十兩灸所

七穴

大腸痛

二六二五有

不定

肝藏左伏重廿一斤十二兩
灸肝二七又云七九灸用

小腸
通一丈



心藏一斤四兩灸肝分
灸心二七又云七九灸用

虎肉
山椒子
川芎
芍薬
桂枝
茯苓
白朮
黄芩
地黄
当归
川椒
干姜
细辛
独活
羌活
防风
白芍
赤芍
牡丹皮
地骨皮
桑寄生
杜仲
续断
狗脊
木瓜
威灵仙
秦艽
川牛膝
杜仲
续断
狗脊
木瓜
威灵仙
秦艽
川牛膝

虎肉

山椒子

川芎

芍薬

右合せ御座し湯に煮る

押さへてゆきたるこめの

粥が用

ふりて煮る

床のたつたぬ板を月の

お用のぬきたるぬを平

糲して一俵つさへする

してたるもみおこしを

ひき飼をし但るこめ

をらぬふりて煮る

下品の草

馬の草

一 芥子

さいろく ほうふ

甘草

右漢じくろのひるあひに

ほうふ

一分系の草

甘草

吾参

山椒子

五福

大黃

一 肉系

甘草

乾姜



肝左右同前

右脾

右脾

右肺

肺

心

肝

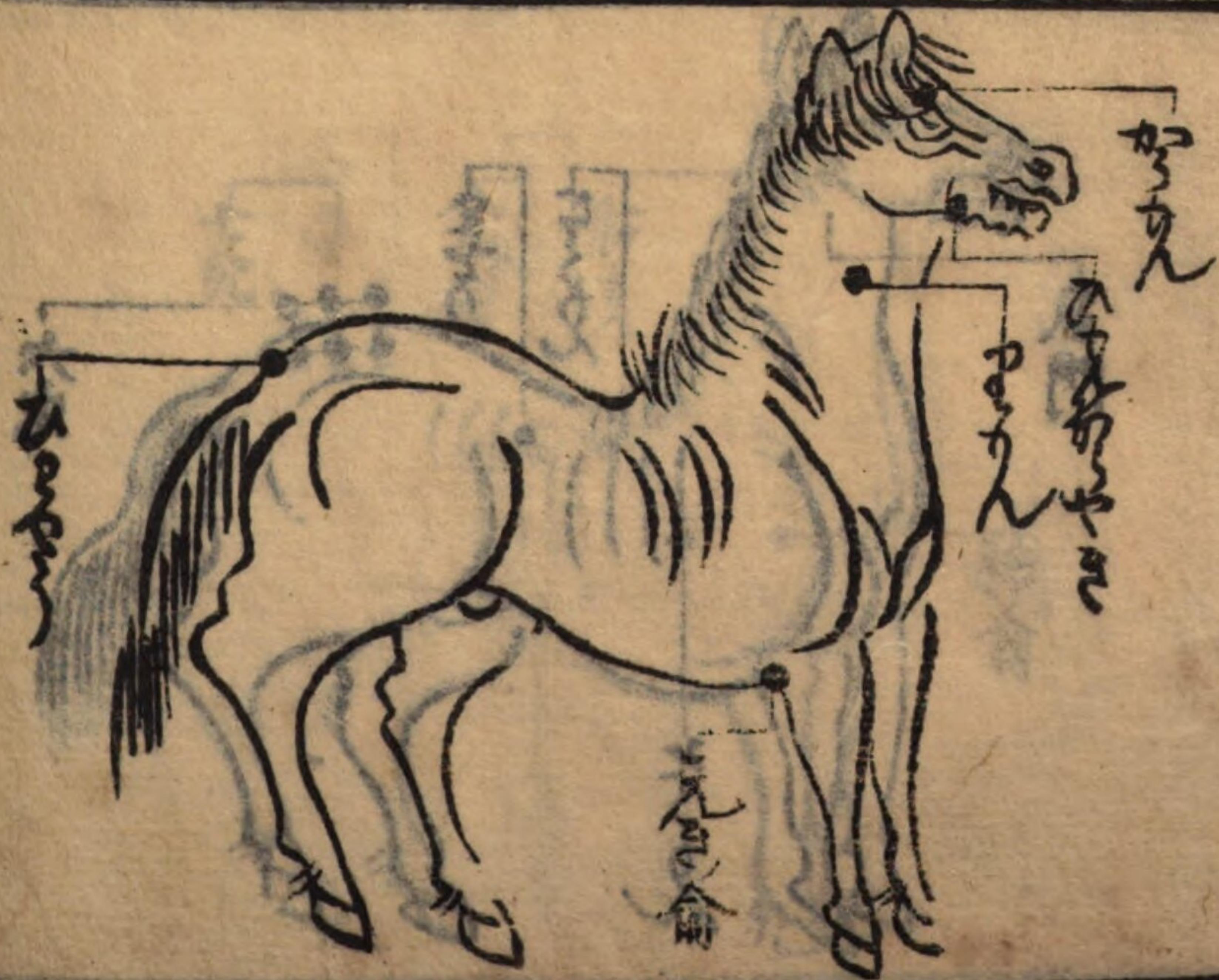
腎

肝

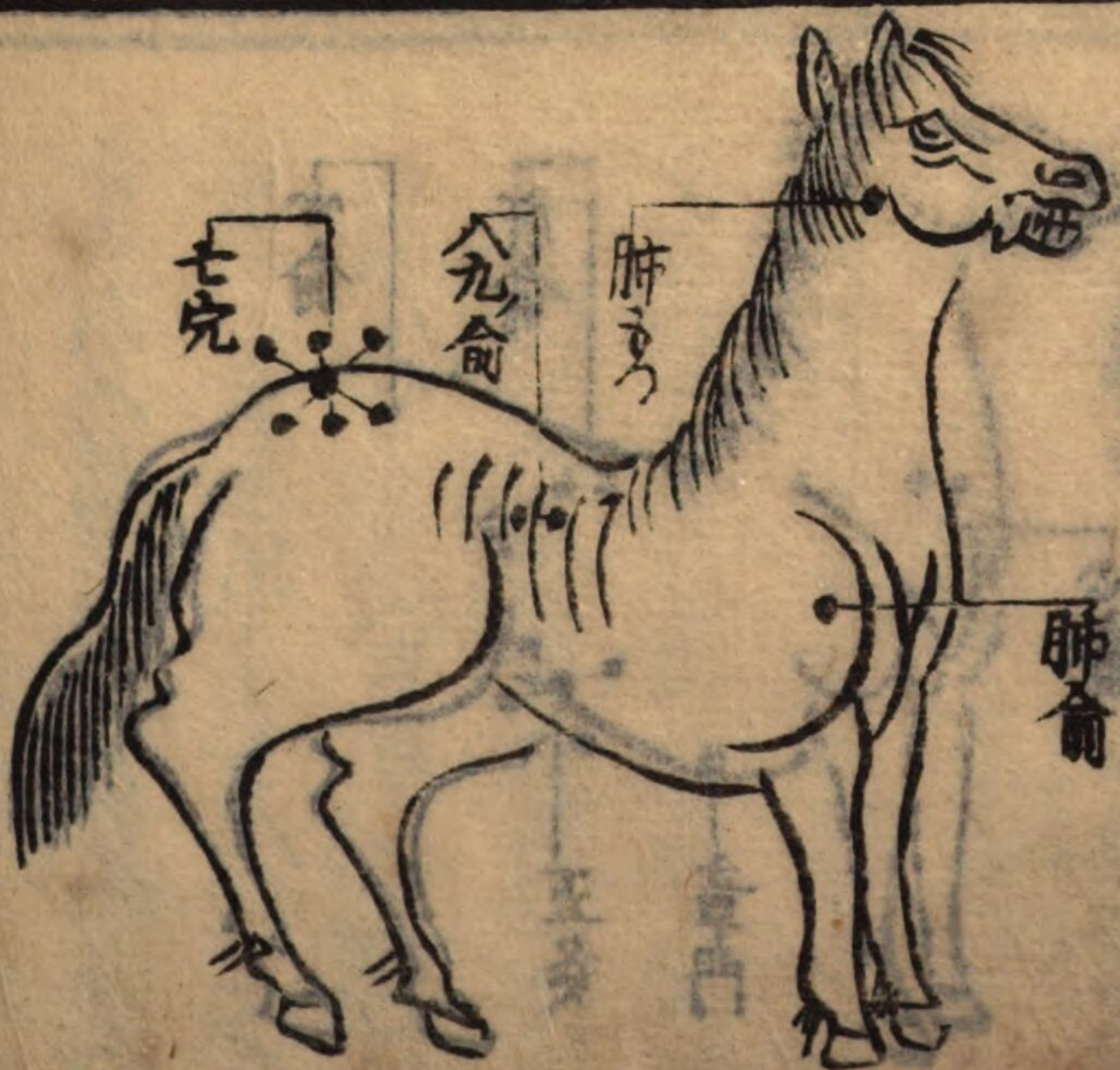
肝

肝









七死

九命

肺

肺命

卷之九

三

針灸穴法圖



うづあかとうちのほ棒
さくきよどしきみ
馬ちうるどし^{しきん}白あし
さても馬あく人いばを
つ^さ死^さあ^さ又^さた^さう^さあ^さわ^さ
そ^さは^さ馬^さ自^さ由^さあ^さど^さし^さ
る^さあ^さあ^さく^さ他^さの^さ人^さを
馬^さく^さく^さく^さく^さく^さ
ま^さあ^さく^さあ^さの^さ人^さを
は^さあ^さく^さあ^さを^さ切^さ有^さ馬^さあ^さ
か^さく^さく^さく^さく^さく^さく^さ
か^さく^さく^さく^さく^さく^さく^さ

た夜よりききあひつゝあは

こころいかにし時^{とき}何^{なん}のそく

馬いさなぞうてんを^{くら}食

んとする時々の待^{まち}候^{こう}ひて

さうく^つあ^い痛^{いた}むるあり

る痛^{いた}ち^いれ^いて^い頭^{かしら}を^いたぐ

そ^いし^いあ^いする時々の^い痛

頸^{けい}瓜^う口の^{くち}あ^いく^い馬^{うま}を

あ^いく^いふ^いは^いあ^いた^いい^いち^いあ^いり

を^い馬^{うま}を^いあ^いり^いに^いあ^いる

まの^いた^いに^い痛^{いた}棒^{ぼう}の^いあ^いく^い

骨^{ほね}を^いあ^いり^いて^いた^いの^いあ^いて

世に人絶つては雨を他うから

三寸さうき小幣こへいを切み

幣へいのちてこへいをぎへる

既いに革くわやなり

たすうりさうり生なまある所ところなり

ふし大おほ油あぶら所ところ合あはてがの

樽つぼの分ぶん

和馬わば人ひと所ところ合あはてがの

樽つぼの分ぶんとて

いふとさうつゝある所ところなり

る所ところはさうしての樽つぼの

かく和馬わばの所ところなり

瘡中比、指のさしてさし

かいて、根をくちやうかき

大切あり

一何瘡少てもその五臓ちぞう

少令てその位くわい所さして

法の臓そく乃中傳ふりて

何ぞし

一瘡えん瘡きハ令さるゝと

治す

一瘡せう瘡くきハ人々て治す

人々馬くまハさし

一瘡えん瘡の瘡が連れんて

たぬひ

ちと原るゆゑにふとふとくして
細きちちて靴^{くつ}を馬^{うま}あふ
ちるがひをてしゆえに押^おさ
ふり^{うり}あてこふにふたふた
あふてとやうなるあり
ひむ^ひは^はの^のは^は乃^のお^おは^はと
は^はよりいふこと

は^はお^おは^はの^の中^{ちゆう}には^はあ^ある
例^{れい}ありきこ入^いるは^はひ^ひは^は
の^の陽^{やう}を^をふ^ふち^ちの^の陽^{やう}の^の
間^まに^にし^しか^かや^やの^のま^まは^は

金と子

ニナ

又方

ろへ湯

ゆ使

ちきふを合_{り傳}

針跡_をで_り焼_す

一升_をろり_を大_に懸_てワ_るて

針_を煮_る方_をと_るふ

巴豆_を油_に傳

又方

そば_をから_りめ_く

鉄_を湯_に水

ち_をち_を合_て合_て合_て

佐_のろ_を合_て合_て合_て

俄に倭の勝あり

一倭のれあのおに俄ある

蓮の

峠

大にう合て分るし

み

巾しやう

大にう合て分るし

俄に喘

あ

お

胡

は

大なる

猫養

右等方々金工國平し又傷

る所よりて用ひし

盲眼の事

「盲眼よりて俄目白く

なりて候ふと云

土形

難養

右等方々金工國平し又傷

る所よりて用ひし

盲眼の事

「盲眼よりて俄目白く

なりて候ふと云

一馬の如く向ひ首あられ

== of the 5 m of 105

麻子

たふ

車毒少

又方

五倍子

齊

古くんとて相成し

三應お徳のり

一虫^ち出て俄^と中^{ちゆう}より出るや

有
 鬼
 之
 れ
 物
 子
 之
 成
 二
 座
 在

傳

考集

雞黃

陰陽の初

系々

青毛

栗毛

康毛

月毛

黒毛

ひき毛

えり毛

ちり毛

かり毛

とあん

苦毛

ひざり

糟毛

河毛

くし

やえ毛

アサ毛

ちり毛

やえ毛

陰陽をとり上殿の陰馬

古相あり

一むらうにむらうをたぬあり

目つらうにむらうをたぬあり

かむにかは

一ふらむ久くくくくくく

ひそくくくくくくくくく

おろくくくくくくくくく

一かゆぐくくくくくくく

おろくくくくくくくくく

おろくくくくくくくくく

おろくくくくくくくくく

一 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

五病の吉相

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

一 舌の根に 舌の根に

藪ノ子ト云也

一 勢又ハ 偽者といふ事

藤
じ
ふ
う
う
か
き
さ
り
り

一老馬らうまに茶ちををずくるをもし

菜のる志だうふくし

一駒こまの病は少くして葉の

るお進るるぞし

五病の要綱

一 碁馬腹をくぶる事なり

吾人腫死之曰死

水部侍郎

一生す白く身なりをある水

一馬の血現る時亡血とある
血氣が可なりぬちいまして
血は肉のりなりぬちいまして
亡血とある

一血とあるなりぬちいまして
しるなりぬちいまして耳の根は
汗かきなり

一人の血なりぬちいまして
血は肉のりなりぬちいまして
しるなりぬちいまして耳の根は
汗かきなり

病馬^{ひょうば}と相^あする

一馬^{ひとば}は^と腰^{こし}の^なな^りと

知^しる^る腰^{こし}の^なな^りと

尾^お力^{りき}る^る腰^{こし}の^なな^りと

知^しる

一馬^{ひとば}は^と腰^{こし}の^なな^りと

子^こか^かの^なな^りと

子^こか^かの^なな^りと

る^るを^をし^しる^ると

子^こか^かの^なな^りと

子^こか^かの^なな^りと

子^こか^かの^なな^りと

用きばしそはのそを病ふ

同より

ス方

すんくそんきよ寸白骨虚の証じ

しん生毒も うん乳毒もたなきひし

ぎふ愛そのよと併の食乃

ありふとそむくのとく押

をしそふの食たそあり

ふぐうはぐをしそるそえ

りげ火と焼く

うん乳毒も

しん生毒も

ち初しく治し用ぐし

右のき契ふはきざらふと云

らう初川志くかんと名有る

佐のき病と用ふ薬

かん粉かん 胡椒こしょう

右粉して食けの属ゆと丸ト

かき平へいををししをを後

桃もも白皮はくひ いのうり

みいり

右等みいりをを漢かんししをを丸まるをを

初はつりり蓋がいして丸まるををととをを

るるふふ中ちゆうををととをを丸まるをを

初はつしてして中ちゆうををととをを丸まるをを

七ヶ條

一 目^め 耳^{みみ} 鼻^{はな} 舌^{しほ} 唇^{くちびる}

毛^け えん

右七ヶ條と左七ヶ條のまじり合ふ別

なり

此等病六目^めのうち^{うち}は^は耳^{みみ}と^とは

鼻^{はな}と^とは^は唇^{くちびる}と^とは^は舌^{しほ}と^とは

毛^けと^とは^はえん^{えん}と^とは

まじり合ふ^{まじりあは}る^るは^は耳^{みみ}と^とは

鼻^{はな}と^とは^は唇^{くちびる}と^とは^は舌^{しほ}と^とは

毛^けと^とは^はえん^{えん}と^とは

すべし^{すべし}同^{どう}なり^{なり}

ゆりて法のきく瓜飼とらふも
焚きあはじし内可なり瓜
押てこはるくらたさあず
き瓜^{うり}焚きとらふ
一ききとらひ肝の^{えん}膳の
膳の^{えん}飼小き^{えん}うとて法のき
と飼とりたさき瓜^{えん}飼め
じし^{えん}瓜^{えん}飼^{えん}ら^{えん}焚きとらふ
たこ^{えん}瓜^{えん}飼^{えん}あて^{えん}焚きとらふ
を^{えん}飼^{えん}ら^{えん}き^{えん}た^{えん}法の^{えん}膳^{えん}の
は^{えん}る^{えん}飼^{えん}ら^{えん}移つては
き^{えん}か^{えん}と^{えん}あ^{えん}ら^{えん}て

瘡のり

一瘡のり

大頭 りゅうしゅう 名焼

こいり 名焼

天南星 てんなんせい

牛皮 ぎふ 名焼

たきか合符 あひり せしむる事

のり

瘡のき焚く事

一瘡をあるい瘡の上をき

毛 け 出しし瘡 け 焚く事

上の毛をわく事

方焚く事

胃 い の腑 ふ 膀胱 はうたう のる事

忘れお田々條

一廿月 そこひ うつみ 廿月

大徳の月乃れ 旧のあつる和

と云くゝ死すまきべー

一養をりくゝか島に人まき

出入の乃れ 様ふあり

一あい 誰そを こころ 馬にみ

たぐに 夏いたさく くらむ

又まきりみ 忘るあり

一 じんきよ 背虚のきふ 張 も 公 こ さん

弱^{いさう}はねすづたにえきふは
 かやうな馬に女馬とて立て
 腰小收^し瓜あるふ掛るは水
 弱^{いさう}のどくちうは一の馬をて
 んれぬいばうとおすりのあり
 馬を穴のちうへに替はずむ
 なと有馬分えするより肝
 要^やあり
 一あいた、唐^{てん}活山に馬をて
 いふもくして取立て種^{かう}瓜
 いふむし糸のね又い種^{かう}保^{こう}
 ねん相^{そう}のりかへる人かぎ

あはれいふに條

佐の名馬久安狀うちうの
うとつた書きふするうに
口元まふしうやう馬ふ
能の馬乃すりたる書きふ
はすじけ書きふ出すじ
馬至子ふうにふと書き
久くかひるるるおと
ひろ野狐ふするるう一の
藤原あり

一五淋式消渴くへるま

引はれ

四品

平金よりふり

太所のひき方何れも大秘傳と

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of the title or a related note. The text is written vertically and is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side of the page.

Additional handwritten text at the bottom left, also mostly illegible due to fading and bleed-through.

あてはて

猪油 いのちり

猪脂 いのちり

右等分を二ツ合て

糖蜜 つちみ

かいもやうぬま

ろふか ろふ

かちやれん

右等分を合て右の油を

移しうけて煮て

いふやも早くぬる

くさいしやう

右のやうに

煮とろけて

たけ

湯の匂ききこえたりてふき湯
とあそびてみたりて湯とて
かくのこく三衣をきりて
馬にひて湯つゆをぬく
わづれに肌あの毛ぬけはさる
るふう小肌あとあそ
るあ先たりてふぬりて
ぬく肌あの根あをぬきあそ
あそびあひあそびて
肌あをぬきあそび

一才十なりとてふれのみ
たふあそびてふ刀目肌あ

醫家すて書し是も後

和なりなと血分とるをし

一才の法の所乃物分はする

をり

枳葉

こもる木

をいろう

いめろう

あやこさう

太春の葉

右の葉と今そいふもく製

して馬分なうまの肉と新

二の豆分ちては若く湯に

けえろをうまのこころを

へだし所七分ゆきあるあり

痔瘡を治すに用ひたる薬

すきりふくふくをうすくすり

すきりふくふくをうすくすり

すきりふくふくをうすくすり

すきりふくふくをうすくすり

すきりふくふくをうすくすり

牛は 甘草

猪油 ね脂

右諸油を脂等分をうすくすり

大垂れをうすくすり

大小をうすくすり

そくをうすくすり

けうき音聲公歩て雷と耕

二おとどじ虫死てうとひ
くろふるほし

一才七やまね死のるう養刺て

やまねいころ先へたの虫に海

へ又赤牛乃額あかしの毛いん込し

きへを腰ね脂あぶら込焼やて

よりかやうの馬とぶはる糸

なぐ血ち込みをしころと腫はれ

ころまかへるけうり血ち込出さ

をし

一才ハミダつたてぬけとる

あそびだてはすの多きれり
めり白出狐目又志をなす
ま後^{すうやふ}ね^{やれ}脂^あ狐^あ様^あうりて
かいろごり時うりれどこの
とて^{うり}寄^あて^あ寄^あて^あその後
月^あと^ああ^あう^あ七^あ口^あの洞川^あの
一^あ才^あ六^あ所^あ狐^あ虫^あ冷^あて^あ白^あさ^あの
出^あて^あこ^あう^あう^あふ^あ六^あ虫^あ屋^あ狐^あい^あう
月^あと^ああ^あう^あひ^あの^あせ^あて^あ冷^あて^ある
定^あく^あ童^あ子^あ洗^あ髪^あ狐^あか^あの^あゆ^あを
あ^あて^あて^あ油^あ狐^あこ^あ向^あ一^あ定^あて
そのよ^あう^あう^あた^あの^あは^あ狐^あ物^あと

くりよはに切れ先くすくく
てよに刀^{かた}があてるし横刀
りふよと糸のくとりがくぐ
三分はうこさむるり
才回へはちとて^{うへ}す
るの切やうたのく切
軽石^{かろい}しはなちがく
あう^{うへ}くとりくはすの奥の
るはがし分をしみる
みさなも^{うへ}く^{うへ}は
一寸^{うへ}く^{うへ}はく
痛む^{うへ}く^{うへ}はく

心ち之改牙

一才一虫すゑ所しよと云ふは方一文字小
さなり角紙あり丸めむふと云
うらよんこ切り足と云ふ刀小
まがり刃牙にむふはきこふ
あり

[illegible]

予之その所の^子るむふふふ
 て^{ひら}ふふふふ

右合也 持たず 孤 秘りて 願也

卷之四

20 Oct 1871

Rocky Mountain

1803

卷之四

卷之四

at 1500 ft

卷之五

卷之五

卷之四

肉筋乃病にきくるべし

はの病に肉筋もほくみ

肉筋あもりり口傳

一病の左右筋知る

根力相傳云左右の目筋

るるこちいさなめかあす

病りりと知れし從初方

目筋本とて平し

一口中針と入筋中あす

たふ時のる

昆布粉

昆布 洗剤 十支

人、爪 一支

刺髪砥二支

烏賊骨 各等分

知者

とらふ

減半
 態

右務としてる本の善を以計

梅干の汁等分して合せしむる

祓ぐ祓ふ合あひ鳥とりの羽はゆて

目入

一五藏さぐりのる

一、（一） 府の相^{さう}當^{とう}と云て、（二） 勝^{しょう}と云ふ

時の體ていと云て腑ふを治す

一萬病ハチマン二病ニマン三病サンマン

内心の病に何ぞと禁と架

江戸

カハ

かし

土器粉

右 土器粉にてぬりかきぬ

指^ね死^にぬてはの糸むるゝ

より酢^すぬてゆるゝ解^とて

分^{ぶん}だし

一よりこれとほぐさ

瓜^{うり}葉^は根^{こん}

土器粉

揚^{あがり}梅^{うめ}皮^{かわ}

かし

天^{てん}南^{なん}星^{せい}

右 粉^{こな}にて酢^すぬて解^とぬ

一 袋^{ふくろ}の目^めくすりあり

うりやうり

解へし一箇を海入をな

み骨用々用べし

一対相傳のり

是ハ竹書出ても一部の

かきすゝれし秘法あり

○此の病かづらひあり

方此是ハ三角あるあり

て背^くみ^みりて追ふる

○ちす白あゝりゆく申

歩一そくあゝりゆく申

高^{たか}る

一^いは^はは^は五^ご金^ご葉^えのり

夕川馬あつる状うく吟しそ

咽をし一箇一歩ハを夜こ

あつ目こ二夜も二夜も馬の

年山よりて咽をし

三封相傳乃る

何病の馬いそ一日平馬小

るすぶき業あり

人の膝中より出る虫一匹

龍腦一分馬腦

一寸内こしみる元鎖陽

灰薑根 荳毛馬血

上巻にておのておのて

おのておのて

けも馬の血

右等分合を分平し煮て
そののけり灰をくたきて
生汁を洗ひその上を煮て
血ぬ乃符

飛孔 𩰫 光 翅 筋 則

此六則をん

一法の筋乃葉

良香 一両 白木 一両

乾姜 二両 せんろ 一両

右粉よく酒中へ細る

章門と云ふをいふ門と云ふ

一玉傳ヒツコの多

二六の癖くせとあるなりしを

何處有二三知己

おゆい三つ考ふゆい

是よりく肩にとぬい乃伸

くえん
くえん
くえん
くえん

さういふわけに
おれは

仲と村ありうへとあり

口あり

血爲氣乃子

恒コホ瓜カ結ムスてテ朽クるル纒ミ

一せりたるのき

水子 いぬ 塩目

ちきふくして地^{ちきふく}を炙^{せん}のけ

ちてちうに瓜あめすの腹^{はら}申^{まを}

あちせぬ草^{くさ}木のる梅^{うめ}木

敵^{かた}箒^{はら}ありんやうのるあ

あふがーあぢいあはー

ちいさういんちんあこはあこ

一二七のあめつういんちん

いんちんようちす下れ脊^せ骨^{こつ}

て炙^いす脾^ひ門^{もん}と云^いちぬり

ちちうちのちちとを

用下しあはれ秋冬あきふゆハみえくとも粒

用をし

一法の種州葉のり

ぞえ

大根こいん里院

胡椒こも少

右酒中用をし一箇一

入をしはるびとよりあを

ねうみかいて後あ用下し

るるびゆいとより何とあふ

ねうりゆへ知べし

二箇入をなす七箇

つ角べし

一五淋こえんヤこちれ糸

乾毒かんどく一両 干かんとと一両

葛くわ 一ひと 胡椒こしょう 五粒

右粉して酒と角べし一箇

一珠入をなす二箇用べし

一ふいね糸乃る

茯苓ふくろう一両 さいやう一両

る木るき一両

右粉して酒と一箇一珠入

一をなす二箇用べし

五箇灌頂

一法の久馬の葉

牽牛子一匁

懸膽一匁

芙蓉一匁

右を粉じて酒に酢すを調

合し一匁に一法つぎを

七箇つ用をし

一虫すく白の葉

むくちく一匁

乳姜二匁

あゆくま

右粉じて酒に酢を調合し

凡見

凡香

辰砂

右等台合てせしる水と
細塵し

牙五占とそそのる

ととそとついで尾ぬけて皮

たれ赤くあらはれり

天南星一両
さくち一両

煖塩二分

右粉して甘塵し但茶

甘るおと馬飲とほす

尾中と中と新より血と

たふあへ押返又上おも有る
ふみ^{こころ}誘^{こころ}集^{こころ}水^{こころ}こ^{こころ}と^{こころ}死^{こころ}入^{こころ}念^{こころ}じ
る^{こころ}み^{こころ}け^{こころ}重^{こころ}じ^{こころ}瘡^{こころ}活^{こころ}の^{こころ}間^{こころ}
重^{こころ}く^{こころ}く^{こころ}に

カ五十三 かつりのみす

ふ^{こころ}り^{こころ}と^{こころ}ふ^{こころ}に^{こころ}即^{こころ}つ^{こころ}時^{こころ}も^{こころ}み^{こころ}い

垢^{こころ}垢^{こころ}瓜^{こころ}ほ^{こころ}う^{こころ}時^{こころ}も^{こころ}候^{こころ}と^{こころ}あ^{こころ}れ

ふ^{こころ}そ^{こころ}嘶^{こころ}う^{こころ}と^{こころ}く^{こころ}あ^{こころ}け^{こころ}さ^{こころ}ぐ^{こころ}び

そ^{こころ}候^{こころ}あ^{こころ}は^{こころ}ぶ^{こころ}り^{こころ}も^{こころ}あ^{こころ}り^{こころ}み^{こころ}形^{こころ}と^{こころ}

起^{こころ}て^{こころ}こ^{こころ}ろ^{こころ}ふ^{こころ}も^{こころ}あ^{こころ}さ^{こころ}え

白檀

宝檀

五倍子

山梔子

唐紙

新乳の耳の肉の毛ふ包を
つまみしるをく押出さずし
ぬく時い裁なもりかき
解てぬは分てく川てはて
ぬてしは^{てん}條^{てん}條^{てん}のゆにあお
あづるに

牙五十二はふとはづれる

時のまれり

くちやれどろろ

蕪^{つら}のくち　くちか　黒焼

牛皮　黒焼　かいやうぬ　黒焼

太猪の皮をこすりかきぬる

才五平 かしらくら ちん

うくありてき後同是

さるる

川^{せん}草^{そう}二^し 茯苓^{ふくろう}一^{いち}支

玄^{くろ}白^{しろ}二^に 山^く萐^せ根^{こん}二^に

右^{みぎ}粉^{こな}とてとら^{とら}か^かう^うく^く然^{しか}漢^{かん}じ

一^{いち}角^{かく}一^{いち}味^み入^い一^{いち}な^な二^に角^{かく}う

月^{つき}二^にな^なあ^あ白^{しろ}も^も用^{もち}登^{のぼ}し

才^{さい}五^ご十^じ一^{いち} 志^しの^の目^めれ^れの^のろ^ろ

山^く萐^せ根^{こん} 若^わ毛^け馬^ば血^{けつ}

阿^あ膠^{かう}

ち^ちの^のく^く新^{しん}う^う合^がと^とか^かい^いゆ^ゆく^くあ^あ時^{とき}

ちきりして等分せしむるは
子^この^うく^き物^{もの}候^{こう}を^をし^しを
度^どと^と水^{みづ}と^とは^はぶ^ぶし^し
分^{ぶん}五^ご所^{しよ}分^{ぶん}なり^{なり}ち^ちず^ず
く^くう^うふ^ふす
藺^いの^の根^ねと^とに^にあ^あう^うら^らん^んを^をは^はら^らふ
て^てち^ちや^やめ^めこ

ふ^ふち^ちの^の皮^{かわ} し^しぬ^ぬあ^あそ^そ黒^{くろ}種^{しゅ}

ち^ちき^きり^り分^{ぶん}す^すり^り分^{ぶん}ず^ずし^し。又^{また}は^は。

ふ^ふの^のか^かす^すれ^れ腸^{ちやう}分^{ぶん}千^{せん}し^して
粉^{こな}じ^じ大^{だい}の^の油^{あぶら}分^{ぶん}押^{おし}合^あせ^せて
肌^{はだ}分^{ぶん}ず^ずし^し

作はし

カ

可 吟すべし

分四式 不食のす

大英

英本

赤小豆花

葛

右竹通こる等分 別小

加ろ瓜 炭じいのこはち

細小 刻ミよくきつて

たろ湯出てのぐくかみ

一筒小一殊入一夜小一筒

物タニを服用し 〇血小

解て不食する

宿砂

紫葉

うのきみ一なるこちく日か
三日も早白も用をし

分早七凡と虫小をれろる

はわみ虫にくろるねぶかあす

白兒ものりるあり虫くそみ

拂ひ冷れろる穴へりくんの

頭の髪み髪なのおもてい

こちりてき油みさ師て穴へ

髪べしき上ふる白兒のはと

粉ゆて付くろ青き葉み

うりくみけて二ねとく

昼し必ず出出て二夜冷る

計とじし 循^{ラロ}みく^ミけて^ミ 子の
こく^ミ 多^ミす^ミどし^ミ 烏^ミ 瘦^ミた^ミる^ミ ぶ
系^ミ ぼ^ミろ^ミ 用^ミ也^ミ ぬ^ミる^ミ 系^ミ 以^ミん
う^ミく^ミ 喰^ミや^ミろ^ミ 少^ミて^ミる^ミ の^ミら
多^ミす^ミど^ミし^ミ 齒^ミ 孤^ミく^ミひ^ミ 考^ミあ
ぶ^ミろ^ミい^ミ 多^ミの^ミ 病^ミた^ミる^ミ ぶ^ミし
才^ミ 四^ミ六^ミ 節^ミ の^ミ る^ミ
方^ミ 黄^ミ 三^ミ 砂^ミ 葛^ミ 二^ミ 砂^ミ
氏^ミ 薑^ミ 根^ミ 一^ミ 兩^ミ 牽^ミ 牛^ミ 子^ミ 二^ミ 砂^ミ
た^ミま^ミい^ミや^ミろ^ミ 孤^ミ 疾^ミじ^ミい^ミ 病^ミの
ひ^ミざ^ミと^ミ 割^ミと^ミ 袂^ミす^ミり^ミて^ミ 右^ミの
と^ミい^ミろ^ミの^ミ 考^ミ け^ミと^ミの^ミ ぶ^ミく

る菜

菜菔

蓮肉 れんじゆ 各二分

右粉少して酒少て用ひてし
馬くくえんくうて水もたひく
豆狐洗ふべし馬勢うしうたふ
血狐を煮し馬あふふよと
いへとも茹すはよくほうくす
えうふて和わしたふべはる
くそ狐ちり少てのづて多す
をし茹すくく煮くふ口の
あふふのかうやさ小焼を煮し
茹すも細くみくひちちふ

るも乃今一但是はるる
りりようをし

牙四十五はるるのる

つるひとらふ眼小白丸の

多き拂りるるの歯し歯所

くひてとらふあふふの歯し

舌とん腫ぶるのあし是と

系用べつる

眼小^{アカ}白丸あや^{アカ}拂り^{アカ}歯^{アカ}も

少くくひとらふあふふとん

も^{アカ}種^{アカ}た^{アカ}る^{アカ}は^{アカ}系^{アカ}用^{アカ}べし

温石

白木^{アカ}各一^{アカ}枚

そくおろしりふいとくらの通

よりの上の肉落るあり

黄心

瘡の秒ぬれたの毒氣落る

変くしてあつくり小腔なる

と死に居る人の油を落す

皮を冷すべし所あむるに

才四齒 第一の

桂心

阿膠

右粉のそ骨折たる毒

はせ巻針でしふふより時

よりてはさうくあつめ

炭じ 豆すたふさうきて
七角 右の呂要公一様く合て
相登ー

才四十二 ほうめうやんじれ
たろきれろ

赤は 玉焼 五倍子

犬頭いぬのしら 玉焼 胡椒いっぺいが

右粉のしでかひ少てと免疵めんき

のふくふくなと甘登し 梅やの

こい又少分長かりさうく

塩湯しおゆ少てきふ分なるはし

才四十三 ちちありのろ

牙四下 あり程に便血多

ひやく菜のり

さいり 五錢 茯苓 一両

干とうろ 一両 乾姜 二兩

右粉ゆいて酒ゆて稠じし

才四上 むし腹ふい程金病

菜のり

る菜 一両 良姜 一両

むしち 一両 さいり 一両

乾姜 二兩

右粉ゆいて酒ゆて夏草と

竹は紙

延菊 王焼
一丈

右移して酒少く咽をし

風病の根ひよりして疼ふ

かたし寸のらるをししを耐

又瘡の肉垂瓜合せて七

風病の葉瓜合せて七

咽をし

才成み疼ふ寸白

ちやう葉のら

あんめん二味 二味

むさう一丈 二味

右移して根のは瓜合せて

治て後ね草紙吟

ふい子^て負^{ちい}馬^{しな}の内^{うち}薬^い紙^し用^{もち}て

才^{さい}不^ふセ^せか^かこ^こふ^ふ大^{だい}さ^さく^くえん

か^かや^やく^くの^のろ^ろろ

宿^{しゆく}砂^さ一^{いち}あ^あこ^こい^いち^ちろ^ろ君^{きん}後^ご

薬^{やく}一^{いち}あ^あそ^そえん^{えん}一^{いち}砂^さ

右^{みぎ}移^{うつ}りて女^をのこ^こし^しめ^めて^て十^{じゆ}日^{にち}

同^{どう}を^をし^して^てさ^さす^すぶ^ぶろ^ろう^うな^なに^に用^{もち}て^て

才^{さい}不^ふハ^はか^かさ^さふ^ふや^やび^びや^やろ

か^かう^うび^びや^やろ^ろの^のろ^ろ

才^{さい}ろ^ろ炒^{しょう}一^{いち}あ^あ同^{どう}君^{きん}後^ご

同^{どう}生^{せい}一^{いち}あ^あそ^そえん^{えん}炒^{しょう}二^に砂^さ

ゆふひやうのう

湯のゆくふらり酒と糖と少

加ふをし

牙石云む世馬のう

先たりの耳へ油を入るし

赤小豆花干

右粉ゆして山の草子入おとじ水

やれそくちの薬水合せ小茶

碗ふ一とふ一筒用べし

はよくむせと一筒あて解るう

かたふたうあうの先ちの薬

とあうみく喉まづんへ入るし

押込をなし馬に勤くはるる
うれを後態の膳狐ぬる湯を
たてく三箇う咽ぐしをさぐて
平素をさるるあり

才元五せくすりのろろ

雀 さくさく 名焼 なや 葛 くわ

糠塩 なげん 牛は うし 名焼

鹿角 しかく 名焼

右等方洗きて分ちし定焼く
り死くく髪かみの油をていそを
分ちし

あふ必ず平金すべし久く
はれ秘しして久く秘ひき
とてべし秘せ死もり薬も
むひの薬何者あり

才木三馬のふみみなる

くさり山

龍そ毒う 二ね 然ゆ膳えか

右多良のほろ瓜酒少て薬じ
をけふてうの薬瓜一筒を
殊入をな小三ろく用ひし
才木はさうきうんるる

押込ををし馬か

ひを時どきもちう中あはは

あゝ腫たふいふことをすべ

それあのおこる

かゝる品 巴豆

みはさ 夏草

太きくいあさう合せ



紙を是移ふまゝかのみま

その紙ふまゝくぬけて押付

る中あははるのるんあ

百會の穴ふ押付し胸のるん

ひくびあふさうかとのるん

押付し腫れく二百日のあ

かすきふさぐくさるる

夏あぐ天南宮公はる

うけ登

才世一少のさるる

凡ふれめのならるる

のとほりに雅あてり穴

ゆきけを穴の通るにゆき

横ふし目をさるる

穴のゆへうとさるる

打ふらり静ふあはる

凡といふ上へさるる

才世二腔物のさるる

廿廿八 蛇の谷にたてゐる

毛のけしきれ油はたてゐる
あり

またあのを焼

ち狐猪の油あふ油をそそぎ

水尻いむ

丹世の馬ふくをれろろろ

まろろを煮どろろのけまをかみ

を後猪の油あをそそぎ又猪

或は熊くまふくけられろろを

けあてろろひ猪の油をそそ

か三十牛しふはれろろろ

かぶろの草はそそぎを焼

酒山て何ぞしひまう鶉の文ふ考ふの文

くさひふふいお菜をよる破亡

せふの出張やたそくらの

むく銅平し〇又あうりよ宛景

右等分令之者人喰たる云

ヤコフキ水亡用也。○まゝに

喰方人の身 齒石水

羽子服奈ふれぐ瓜妻根くまろく

をかし加へてし頻あつくし備あひふ

もつて梅こけの花はな瓜うり加かく登のぼし

分廿八
蛇ハコ
咭カれハコ
万マン子シ

くはれさるゝ而た小をねあて

ろくろしきあし

かきみみ根^年 瓜葉根^二 二

白葉^一 一

右細末くといふはもすたれ^す

一箇と一鉢入一箇と七箇^ふ 同

いたあしと又いささくあくるん

やまの水に飼せし川へ

ひやする

やせと毒^いとくひる年

毒^く瓜くひる馬へ^あ 捕まかみ

腹^そふれよとみみ^あ 守り

物^く株^ら 猫^ねの糞^{ふん}とくひる

あかゆきと云はれて骨をこすり
うろき人爪の尾をぬき
ぬきよきもは葉と云ふ
ぢしぬのぬのうろき人のほ
細^{あか}針^{あか}と云はぬあつちけき
かのぬの針と云はぬあり
あか六と云はぬのう
ひきぬと云はぬうろきも
さぐりてぬきぬと云はぬ
のりけと云はぬ人の陰のう
はるきと云はぬ二月より八月
うろきと云はぬあかぬのうろ
き

祖

九

樹の中へ立ち寄りて入るし

秀成もいざしほの車馬を

梅子の肉は福の合せ

竹を張る

才五陰囊は足はきなる事

天竺寺乃云

本草
大麥

後ふ

大漢以之酒醴ハナハ少入ハナハ穀米

他より孤をせりさけりて人々

竹菜

てんやう
とんやう

ちのつ
ふく

いぬぞ

こころのあはれ

より小童様くはまふ十幾年

入ふせとる兒のゆとまこ

ゆるり膝たつあがむし二母

内かかるず活と

中世手頃馬のう

切疵ありとて疵台敷さよば

あふふふふとて(笑)天南星

物とておどし(笑)疵台敷さよば

あふ穴あふ(笑)糟湯とてはひ

あふ手あふ穴あふ(笑)とてはひ

あふとて(笑)とてはひ

七

分廿三

さかきこゝろに世にやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 たゞし人のこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 ありこゝろにやまのこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの
 こゝろにやまのこゝろにやまの

るるひと踏んで強くあらうと

抑^{おさ}木しすうりてあきて腹^{はら}を

かきこいやりくきぬぐり二を

三きひらいて腹^{はら}をさうよう

がひいてはよくとをさば

またづるふ用捨^{すて}ずじ

カサニひる馬^{うま}の葉^はのう

半柿^{はん}三^{さん} ^みをの秘^ひ七^{しち}傳^{でん}

板^い木^{ぼく}は^は干^{かん}十^{じゅう}少^{しょう}

右^{みぎ}後^ごして金^{かね}で曉^{あけ}寅^{うま}のうれ

水^{みづ}そののうては葉^は知^ち勿^な死^し

まて梳^かみ^み二^によい個^こ下^{した}し^しみ^み水^{みづ}を

さうして尾小力色

みさやねさなるる者生如題

ゆわく葉領へく尺内事ハ

川骨一丈 赤土一丈

あさやうし

右粉よく順山て粒を領平

一度く三角々領より一箇く

葉肉一様々入る入るく

ゆ加減の葉

山林 瓜妻根

是れ銅金し脊骨く日之反

と三反も少く入るる

草花より花

さいふ

車前子やまゐり

右漢せんし領計より領をし

針葉ハ四角くなるゆゑに有

左一、右二、上三、下四、

バシ、葉、葉ハ

うぐい

こ

み倍子ちんぎ

右葉一、少なり、酒、水、

ゆて、金し、は、葉、こじ、水、

セ、方、ゆ、く、さ、り、け、什、ハ、

刺さて、ね、た、る、は、く、も、た、ゆ、

松脂す

ち粉よく女のこころを
七も銅をし母のこころを
ねの縁と^{きり}きりし用ひ
才二十かゝぬきの

かゝぬきなる馬引きなる

わたり方のきりきり

土のタビ干粉

りぬたで足履

川引三歩

阿仙菜一歩

乾姜二歩

ちちろ湯を七も銅を
はよくぬきかゝる痛れを

土聖の務

地

ちきふなりをせむと云ふ

のびては(能く)なりし

と云ふなりしなりし

なりしなりしなりしなりし

なりしなりしなりしなりし

なりしなりしなりしなりし

なりしなりしなりしなりし

なりしなりしなりしなりし

同事

宿砂

赤土

若菜

松の根

と云ふに因てあつたり又さうぶひやう
 は守とらんたぬりこゝろと知るす
 きんの皮あらく股の毛ぬき
 うごかう病のうつたる人皆平し
 かた九太むそ
 みすくみくぢらといひる

[illegible]

あつたふりてふりてふりてふりて

とらた若一ききてはきき

俄わかふぬふとふりてふりて

あつたふりてふりてふりて

白木ひまき一ふ 桂けい二ふ

人參じんじん少

ちねてふりてふりてふりて

あつたふりてふりてふりて

ようてふりてふりてふりて

川かわ引入ふりてふりてふりて

今いまふりてふりてふりてふりて

あつたふりてふりてふりて

たろ瓜初幸

たろ

病の重なりと知るし

才十七ゆさき病のり

ゆさき病くさる人の痛小解ま

たろくさくさるくさくさくさく

あすじあま

瓜妻根

あかり

白菜

右の瓜うり移うつしてセウツル出で

七角と八角も用べし右の

あし張はりすり耐用べし

才十八ぬるびやうのり

カサキズンキヨのヨ

ぢんきよとらやなまきんじき

きりかきずねぐら^{きり}鹿えこのた

右狐かきあき^し膝の^{ぢん}自由け

ぎんき

白木^{ぢん}五^{ぢん}株

怪^{ぢん}蛤^{ぢん}三^{ぢん}株

干^{ぢん}こ^{ぢん}ろ^{ぢん}三^{ぢん}株

右粉ゆて酒あて用もべし

一筒^{ぢん}小一^{ぢん}株^{ぢん}一^{ぢん}な^{ぢん}め^{ぢん}く^{ぢん}日^{ぢん}二

夜あかち七日もあまきよりて

知^{ぢん}登^{ぢん}し^{ぢん}各^{ぢん}活^{ぢん}出^{ぢん}七^{ぢん}穴^{ぢん}あ^{ぢん}は^{ぢん}七

〇又ぢんきよ活すところ金^{ぢん}あ^{ぢん}り

みくらいんりも同いあふりあふり

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

所ふかきまきし〇壮勢あて
かき目らうひそくひかる是は
けききききききききききき
けききききききききききき
けききききききききききき

〇見方やうの事

うひひひひひひひひひひひ

すみかききききききききき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

月の内へ押入るしなどし
茶付ざる先^テに眼^{ナミ}の内へ映し
能ひやしそ後茶付さずむし
くをも^{ちんち}縄^{なま}を結^{むす}て一時半
おどろしそ後とるべし
○雪月えりけのるる悪^{あく}なる
白玉の間よむを白兒^{はくじ}の悪^{あく}
玉のこころをのどく物^{もの}
群^{ぐん}は刀の焼^やみのそと^{そと}に
白兒^{はくじ}を度くふく^くのふまふ
する月のおるるをえん
白兒^{はくじ}かすみの中^{なかつ}にあらぬもの

才十は眼病のう

かん病瘰癧^{ロウロウ}治こゆくあそくらた

血^{ケツ}熱^{ネツ}壯^{ソウ}熱^{ネツ}は二所こるるしを

〇うら目〇むら目〇あそくら

血^{ケツ}熱^{ネツ}あり瘰癧^{ロウロウ}治こゆくあそくら

かん^{かん}多^たくま^まの^のく^くより血^{ケツ}と

き後^{キゴ}き^キふさ^{ふさ}す^すむし^{むし}き^キあ^あふ

い^いの^のか^かし^し瘰^{ロウ}癧^{ロウ}一^一瘰^{ロウ}

は^はと^とぐ^ぐ一^一瘰^{ロウ}癧^{ロウ}一^一瘰^{ロウ}癧^{ロウ}

と^とら^ら一^一瘰^{ロウ}癧^{ロウ}一^一瘰^{ロウ}癧^{ロウ}

右^{ミナミ}物^{モノ}とて^トこ^コろ^ロと^トれ^レる^ルの^ノ汁^{ジュ}

樹^{ジュ}液^{エツ}等^{トウ}か^カら^ラ合^カせ^セ研^{ケン}ば^バく^クと^ト免^{メン}

砂なも三冬もほろどし
かあぐり引込あり

才十三 ありあけのる

たまやうふたふちあひ
く根細くき廣くち

漆活六竹刀こかさ切丸

とろとろ難^{たがひ}葉瓜かけく

黒くあつぬぐふと様不

と履革所分及しきき

大^{いね}氏^{うし} 名^な 二つら名^な

ちきり方、合せてよき^す彫^うて

外へ一きも水とあひ

瘡の傍にうゑたりといふ

ゆけしきあり菜の葉

○根やふとウサデかひを焼^ヤて

菜の水をのき^くぬ^えし

水^{みづ}を^をあ^かせ

才十二^{さうじふに}ありしもの

ほろ^ろく^くふ^ふ根^ねもあ^あく^くて

梅^{うめ}の^のこ^ころ^ろに^にあ^ある^るは

お^おも^もい^いち^ちじ^じなる^るも^もあ^ある^る

菜^{さい}の^の葉^は

苦^く辛^{しん}

み^みつ^つら

ち^ちを^を焼^やく^く煮^にく^くて^てその^{その}汁^じを

瘡^{クサ}瓜^カ糟^{サウ}湯^{トウ}也^ヤて^テは^ハく^クて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
血^{ケツ}の^ノお^オる^ル瘡^{クサ}は^ハひ^ヒて^テ瘡^{クサ}を^ヲさ^サぎ^ギ
て^テえ^エれ^レば^バか^カく^クは^ハ強^{ツヨク}く^クえ^エん^ンの^ノ庄^{シヤウ}
た^タう^ウ力^{リキ}也^ヤて^テ瘡^{クサ}の^ノ上^ノ瓜^カこ^コえ^エん^ンが^ガ
ぞ^ゾー^ー血^{ケツ}瓜^カ糟^{サウ}湯^{トウ}也^ヤて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
と^トは^ハひ^ヒて^テ瘡^{クサ}を^ヲさ^サぎ^ギて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
み^ミお^オる^ルよ^ヨう^ウて^テか^カき^キて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
や^ヤう^ウひ^ヒま^マみ^ミて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
と^トは^ハひ^ヒて^テ瘡^{クサ}を^ヲさ^サぎ^ギて^テは^ハく^クて^テは^ハく^ク
ある^{アル}し^シ

カ^カ士^シひ^ヒむ^ムの^ノす^ス

ひ^ヒむ^ムの^ノす^スひ^ヒむ^ムの^ノす^ス

ろね十又なまゝたうひと様下し

○^{てかみ}女頭馬^{ひま}は某のころ

瓜^{うり}量^{りょう}根^{こん} 乃^のいつゝえん

せんは^{せんは} なる某^{なり}ま^まな

右^{みぎ}稱^{なづ}く^くう^うかりはよく馬^{うま}焚^やじ

た^たふ^ふ大^{だい}考^{こう}瓜^{うり}加^かふ^ふ下^{した}し^し領^{りやう}け^けふ

舊^{ふる}酒^{しゆ}也^{なり}もす^すつ^つば^ばう^うゆ^ゆても

又^{また}土^{つち}ゆ^ゆも^もて^ても^も用^{もち}も^もな^なし

力^{ちから}十^{じゆ}水^{みづ}三^{さん}六^{ろく}の^の養^{やう}れ^れる

水^{みづ}ぎ^ぎら^らの^のち^ちこ^こら^らわ^わは^はは^はを^をさ^さか^かで

ふ^ふの^のう^うへ^へ下^{した}り^りす^すか^から^らの^の下^{した}

い^いる^る養^{やう}あり^りと^とな^ない^いう^うて^ても^も

をいゆふふあり

かぬをすのる

たのすてをすたふあすだじ

このまふい

天南星 てんなんしやう

こころ こころ

右今そ外だし。〇又てえすハ

天南星

席角 せうのつゝ 星 星

そふかたをさふまふい

あふ あふ

車 やせん 車 車

あふまふ

そふまふて槽 うしろ 槽 うしろ とほてほひ

そふまふたじ尤の果 うしろ れる

甘菜のろろ

まきいり
白物まき

あき
明儿一

やきう
焼塩一

くろ
枯葉根まき

右細末まきと梅干うめの汁と細末

こぼておかし菜はいらふるあふ

こぼておかし菜はいらふるあふ

てきけゆはいひて菜はいらふるあふ

毛とはいくすりねきたふさ

やりの黒糖くろ瓜はいけ菜とたて

菜はいらふるあふいらふるあふ

つみけ瓜種まきと種まきの汁と

はいらふるあふいらふるあふ

カサ毛むのろ

一毛むしり毛むけ又毛の
根^ね白^ふ粉^ふのやうあるおはれて
いづこ肉業のうきとほの
美^くあり又^く美^く事^{えん}さうある
類^{ちん}ど一^{ちん}度^{ちん}あり外業はあ
あり

カハムヤツのろ

カハムヤツのろ
すりぬくあるえねがりの
い^いくある汁^じ出てすりたうる
はりの毛むるあり

と判^さし旅^りするてさうさうの
業^え計^{けい}をそのて領あり
さる酒のやんの領けあり
しるをし

中^{ちゅう}にびさうし

びさうしらの衣^きぶこたち有^あり

ていえれさうも^けぬなてえぬ

毛^けあておけものて用業

のさう業の肉業同^{どう}あり又

糟湯^{そうたう}をて洗ふ

こころ^黒

ちさうなと合て幾なりとぞし

り美のり

大頭いねのうしろ黒十焼五

こいろ白十物五

天南星てんなんせい五十支

先し皮くわい五十支

右移みぎうつりとて左移ひだりうつりとて分わけ

内美のり

こいろ白十物五

白しろ物もの十十支

大根だいこん五十支

鼠ねず糞ふん七七支

右移みぎうつりとて左移ひだりうつりとて分わけ

銅どう石いし一いち斗と酒しゅ移うつりつつる

右移みぎうつりとて左移ひだりうつりとて分わけ

水みづを移うつりとて左移ひだりうつりとて分わけ

くみくみたたふふたたふふとて左移ひだりうつりとて分わけ

後とよむもあーみ入たし

和ぬきのり

巴豆 去毒 三粒 さいやう 三粒

黄柏 粉 中炙 所つのまき

白物 き候 中炙

右何れも能く合てそくわそ

赤山豆 あかぐま の大さ丸で 瘡の上へ

汁をじはかり貝おーの平し

瘡のぬきより二所も三所も

えさるる入白物とそゆかん

瘡より長し七日経て糟 かす 洗

膿 うみ おし出 根 ね 爪 つめ 根 ね 登 のぼ し

らうの脇あて目の内あり
あいらちたるを知りあひ
浮の内あり同はとさげ
はうあがり目のうちあり
糖^{ちう}瓜^{くわ}味むい大切ありみ
腰^{こし}あいらち腰とあり^{こし}鹿^{しか}ひ
ーちやうきん^{しん}に業^{ごう}する
あいらちの作業にあり
か又かこの

一切はふせたる^き疾^{しやく}とあり
あいらちをかんするつた
疾^{しやく}とあり内業かんする

然るにげあふハルのみとの
牛二和と煮付て夏ハハるを
即ちろろぐたーあいの好の肉
かき焼いてち切ひてゆでる
米

豆かき 胡椒

アロウ炒 ころり 馬焼
各ま残

楊梅皮 ちえさやう

ちあふ米まふ各粉とて酢
ふてとれた竹炭一とく酢とあ
てたのこくアロウ炒とて
二斗米ははててあのとあ

酢き酒のかくみりたて

物とて本末

ふきまき 茯苓

このかうもたえ 各等分

茴香

良姜

右細末して用○冬の内に

注てあつてあぶ酒ぬかしかんを

長じあつて頸扼太一目の内

赤糸はり糸糸糸糸糸糸

あつてより血糸出肺の俞

と灸すし糸糸糸糸糸糸

あつて糸糸糸糸糸糸

才回あいねの半

美、勝あつゝあさ

あいつ、さへく、さか用と

りと、胸けの、る、あ、あ、あ

する、お、じ、口、借、日、ふ、い、初、は

冷、より、起、ち、は、る、い、は、ち、ふ

苦、し、と、初、つ、る、あ、る、こ、き、い、実、は

執、ち、方、小、あ、ず、唯、冷、と、は、り

い、る、平、し、あ、い、は、た、初、め、き、ふ

足、ゆ、り、あ、い、ふ、も、酒、か、く、く

小、う、た、と、ひ、て、胸、あ、り、又、執、ち、ふ

又、い、ま、より、は、ち、ふ、さ、く、し、じ

木細末^ましてなまこ^この病^{やま}歟とく
とや^やみ^みぎ^ぎけ^けと^と用^{もち}も^もあ^あら^らと
ち^ちも^もみ^みと^とる^るふ^ふより^{より}て^て用^{もち}む
○み^みる^る冷^{ひや}て^て形^{かたち}の^の酒^{さけ}中^{ちゆう}用^{もち}
但^たし^し美^みあ^あて^て治^{ちやう}や^やま^まと^とて^て都^とる^る
勢^{せい}ふ^ふる^るが^が冷^{ひや}む^むじ^じみ^みば^ばん^んら
と^とと^とい^い梅^{うめ}の^のさ^さ馬^ばあ^あせて
さ^さや^やと^とり^りひ^ひと^との^のさ^さだ^だふ
胡^こ柳^{りゆう}と^とは^はけ^けす^すぐ^ぐち^ちり^りあ^ある
ば^ばり^りさ^さい^いこ^こと^とわ^わか^かな^なむ^むじ
お^おば^ばり^りあ^あむ^むじ^じみ^みぎ^ぎり^りた^たり^り
こ^こい^いち^ちり^りさ^さり^りあ^あす

はりたりこむるなりきなり

多^ちくとりくともき^え換^かはりのこ

る^るほほ^ほは^は伝^{でん}白^{はく}鹿^{ろく}ひき

く^くま^まや^やゆ^ゆの^のさ^さる^るなり

是^{これ}小^{せう}女^{にょ}美^み狐^こ用^{よう}下^げ又^{また}折^せく

脂^し狐^こか^か下^げ折^せの^の中^{ちゆう}ゆ^ゆて^てな^なわ

は^はまり^{まり}たり^{たり}く^くん^んに^にき^きも^も美^み

桑^{そう}白^{はく}皮^ひも^もち^ちい^いち^ちも^も

如^{ごと}用^{よう}も^もは^はり^りたり^りな^な美^み

白^{はく}木^{もく}

乾^{かん}姜^{きやう}

干^{かん}ご^ごろ

桑^{そう}白^{はく}皮^ひ

大^{だい}黄^{わう}各^{かく}二^に分^{ぶん}

ぞー。生腹もなうもみ
鼻よわきある出さるん必
死す。又生腹スリ好む
えんを斬てあさだー
又生腹はさうもあ
たるえきさや腹の
うりあいつもなうが
病のうりくるも腹
も痛活のや得る
カニばかりなるのす

ぞうけりあひさる
と腹スるふちやとあ

わ 腹いささし 腹あつた

は ぞ 煮だく せ ばつ 煮 せ

い う 煮 小 ち む と ら せ

む ち ち 桑 白 皮

萩 木 一 ぬ ち せ

ち ち ち ち ち ち

お ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち

はざり入てはざり入るるに流
すべし我れ又やこかすするを
おの^{やんや}牛^{やんや}羊^{やんや}公^{やんや}用^{やんや}も^{やんや}な^{やんや}。○
久^い馬^うふ^ふ何^なも^もあ^ある^るず^ず三^{さん}人^{にん}腫^{しゅ}
身^みく^くさ^さる^るな^な流^{りゅう}か^かじ^じる^るを
ま^また^たふ^ふ不^ふ結^{けつ}し^して^て大^{だい}熱^{ねつ}と^とふ^ふ
く^くる^るむ^むあ^ある^るバ^バあ^ある^る川^{せん}の^の入^い
登^{のぼ}す^すべ^べく^く又^{また}白^{しろ}く^くの^の馬^うは^はす^すべ^べ
り^りぢ^ぢの^の病^{びょう}の^のう^うた^たる^るを^を智^ち
脈^{みやく}よく^{よく}す^する^るに^に病^{びょう}の^のう^う
た^たく^くる^るは^はづ^づく^くー^ー
亦^{また}二^に患^{くわん}腹^{ふく}の^の事^{こと}

梅干肉

猪油

おとろつおれまこのけめて
ゆるくゆり長^{なが}守切^{きり}あすこ
は^{くすり}薬^{くすり}入^い三^{さん}す^すみ^み粘^ねりす
と皆^{みな}ろの中^{なか}入^い危^き一^{いっ}何^{なん}作^{さく}
のすれ中^{なか}入^いあ^あつ^つつ^つあ^あめ
脂^{あぶら}中^{なか}入^いは^はさ^さ入^い竹^{たけ}も^もこ
めくる一^{いっ}ス^す大^{だい}ろ^ろだそ
作^{さく}か^かく^くス^すは^はま^まと^と陽^{やう}
ゆてゆるくと^と水^{みづ}を^をち^ちめ^めて
二^{ふた}斗^とを^をら^ら入^い危^き一^{いっ}即^{すなはち}ち
水^{みづ}を^をち^ちめ^めて^てゆ^ゆめ^める^る

飼^え付^しぬはくさるゝあるべし

酸^すをりゝ又^す使^してゝあ

○はく書^しぬはくさるゝあるべし

りゝ酸^すぬはくさるゝ○はく

あぶくわくけりゝあさるゝあ

むとゝる^{きくひ}桑^さ白^{はく}はく^{えん}と

きけりゝ飼^え付^しぬはくさるゝ○又^すあ

あゝゝ^{んぐ}巴^は豆^{まめ}の毒^{どく}あさるゝ

三^{さん}粒^{りつ}あさるゝ用^{もち}べ

○あゝ馬^{うま}さるゝゝゝゝゝ

あゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

馬療調法記

升一斗川馬のす

上谷川中谷川下けりぬるひ

はしちめとされぬ鹿ふれ

尾とこわむらトタリとす

コトとてふたはよくしとみ

まをこしらふおむりよた

タウ馬あり

牽牛子

灰葉根

溫石

葉

大葉

ちきふはちきふはちきふ

一 皮膚のひのろ

手今

一 鼻血のろ

手今

一 骨つぎのろ

月

一 毛の毛ぬるろ

今丁

一 尻つぎ馬鹿生るろ

月

一 舌やぶる瘡のろ

月

一 舌ひびくのろ

今丁

一 口中腫おろろ

月

一 口くちかろ

月

一 眼の目

手今

一 口くちかろ

月

目痛

手今

一 下ひのろ

六五

一 ふうくさくきり

日

一 臓腑の圖

六五

一 針の圖

六五

一 上六脈

六五

一 中六脈

六五

一 下六脈

六五

一 肺論

六五

一 血脉八道

日

追加

一 病馬の生死分

六五

一 瘡の薬

日

一 二んきうのる

五

一 三他相傳のる

五

一 盲眼のる

日

一 俄後時もある

五

一 針跡みづる

日

一 毛馬ふちる

日

一 ひむはるのる

五

一 月丸のる

日

一 筋陰内瘡吉凶のる

五

一 血瘰吉凶のる

日

一 今々ひるふちる

日

一 針灸穴法圖

五

一 病のたぢあふ知る

目

一 針と針たり時のる

目

一 凡て次升

目五丁

一 凡てひみ条

目五丁

一 凡てみ条

目五丁

一 疾のる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目

一 凡て病のる

目

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 疾のきぢあふる

目五丁

一 廿九のころ

廿九

一 三七のころ

月

一 玉傳乃る

月

一 血取糸乃る

月

一 依の糸

廿九

一 三冠相傳の

月

一 一冠相傳の

廿九

一 日足平金乃糸の

月

一 ちきれをはぐる

月

一 依の目糸乃る

廿九

一 五腕さぐの

月

一 病のた右糸知る

月

一才四十三 ともむりのる

日

一才四十四 あまのる

花

一才四十五 はるひのる

日

一才四十六 あまのる

三

一才四十七 あまのる

一才四十八 あまのる

日

一才四十九 あまのる

一才五十 あまのる

日

一才五十一 あまのる

日

一才五十二 あまのる

三

一才五十三 あまのる

日

一才五十四 あまのる

三

一才五十五 あまのる

日

一才木四さうふ^き瘡^きるるる 華

一才木八^せぐさ^りのるる 華

一才木六むせ馬乃るる 日

一才木七大はく^りのるる 華

一才木八瘡^きふ^りあ^り病^がるる 日

のるる

一才木九瘡^きふ^りす白^がるる^り 日

美のるる

一才木十る^り後^ご血^けが^るる 日

一才木十一虫^む敗^はる^り合^が病^がるる 華

一才木十二^う月^げ魚^い小^こ吸^すれ^るる 日

一才木十三も^りち^りのるる 日

一廿廿 勝ぬけのる 廿二

一廿廿二 ちう馬のる 廿二

一廿廿三 そくやうのる 廿二

一廿廿四 子^{てと}原馬のる 廿二

一廿廿五 法^{きん}衣つ死さき^日なる 廿二

一廿廿六 おはれのる 廿二

一廿廿七 毒^{どく}へ喰^くれたる 日

一廿廿八 蛇^{へび}ふ喰^くれたる 廿二

一廿廿九 るに喰^くれたる 華

一廿三十 牛^{うし}に^しつゝれたる 日

一廿卅一 少^{せう}川^{がは}き^きるものる 日

一廿卅二 程^{ほど}物のる 日

一廿卅三 子^こみ^み産^うか^かねる 華

一廿十 心をはのる

辛

一廿十一 ひむいのる

辛

一廿十二 ぼろいのる

辛

一廿十三 ぼろいのる

同

一廿十四 眼がんめ病びやうのる

辛

一廿十五 かへらゐるのる

辛

一廿十六 腎じん虚きよのる

辛

一廿十七 ゆう死し乃る

同

一廿十八 マゝ病のる

同

一廿十九 大だい成じやうとむらみくら死しのる

辛

一廿二十 こね死しのる

辛

一廿廿 腰こしねけのる

辛

馬療綱法記

目錄

一 才一 乃馬のさす

一 才二 乃馬のさす

一 才三 乃馬のさす

一 才四 乃馬のさす

一 才五 乃馬のさす

一 才六 乃馬のさす

一 才七 乃馬のさす

一 才八 乃馬のさす

一 才九 乃馬のさす

一 才十 乃馬のさす

らずく空しく九槽櫓
乃間て並死す一戒小儀
今北一屯、古乃伯樂ノ信
とく之偽書買の求ふ
恵と梓行ふた、僻村
遠里、布抱んるを預ふ
生死を、死に思ひ人當
豈其ふ、人中備世出
よみて天下れ病馬然治す
る、亦仁術の一端ある
寶曆壬午夏七月

馬療個法記序

それ馬いよく室とら我荷まさひ

速とほ死を致さし天下公

利り澤く寸す故こ不ふ周しゅう小八

我わ何な里り淺せん小九逸いつあり

君きみふいそふふ々々耕かう作さくの

然しかととし武ぶ行かうは是こゝにに今いまと

戰いくさ伐はく乃すなは具ぐととあす凡たゞそ

士し農のうの家け一いつ日にちとと聞きこぐ

つつころ者ものやその病びやうんん時ときは

鍼しん灸しう以もつ抱かか一いつ茶ちや湯たうて

飼かひといいた或あるいいそそは款くわん少せう中ちゆう

L. Sap. M 38



馬臻綱注記

Kitayama, Juan

Baryō chōhōki

Kyōto Meiwa 9 [1772]

L.jap. M 38

urn:nbn:de:bvb:12-bsb11166394-8